

問題意識—多言語主義について

近年、「多様性」ということばが多方面で使用されている。生態学の分野では、生物多様性ということばがある。言語研究の分野でも、言語的多様性ということばがある。それは、多様な価値を尊重する、多様であることを肯定するという態度にもとづく。

多様性ということば以外にも、社会的包摂 (social inclusion) というような理念もある。多様性にせよ、社会的包摂にせよ、とても肯定的な表現である。意義ぶかい理念であるといえる。しかし、たとえばそれが「障害のある人も仲間にいれてあげましょう」というような発想にもとづく「社会的包摂」であるならば、どうだろうか。「女性の社会進出を応援します」という言いかたにしても、一見、とても肯定的な表現であるように見えても、そこには欺瞞 (ぎまん) があるのではないだろうか。

これまでの社会は、たくさんの人たちを排除してきた。その歴史があって、その蓄積による格差がある。その排除と格差を是正する。それが今の社会でとりくまれていることである。

理念として社会的包摂をかたるためには、これまでの社会的排除のありかたをふりかえり、直視することが必要不可欠である。社会的排除をやめることがすなわち社会的包摂であることを再確認しなければならない。性差別による不当な排除の歴史をふまえてこそ、労働環境の改善、賃金格差の是正、管理職の男女比是正などにとりくむことができる。

マサキトセは、「ダイバーシティー (多様性) は取り組むのではなく、取り戻すもの」として、つぎのようにのべている (マサキトセ2017)。

昨今の行政・企業のLGBT施策では、ことさら「ダイバーシティー」という言葉が掲げられる。それは「先進的な行政や企業が取り組み始めているもの」であり、目指すべき社会のあり方として啓蒙される概念である。しかしここには、抜け落ちている視点がある。

それは、ノーマティビティー (規範性) とマージナライゼーション (周縁化) である。ダイバーシティーを掲げる人々には、ぜひこれらの概念も知ってほしい。前者は「正しい性愛のあり方」「正しい女性のあり方」「正しい男性のあり方」などを決める価値観が社会全体に一定の強制力を持って存在している状態を指す。後者は、そのノーマティビティーによって「正しくない」とされるものを社会的に不利な立場に置く力のことだ。翻って言えば、このマージナライゼーションが脅しになって、ノーマティビティーに一定の強制力を与えている。

…中略…

本来ぐちゃぐちゃで、誰一人として同じ欲望を持つ人なんていやしないのだ。一人の人間を取り上げてみても、その人が10年後に今と同じ欲望を持っているかなんてわからない。それを私たちは無理矢理カテゴリー化して、序列化している。特に同性愛に関しては、人の特性／属性として、あたかも別種の人類であるかのように扱われ、抑圧されてきた。

そのカテゴリーを前提として「ダイバーシティー」を唱えるなら、それは単なる図鑑作りにしかならない。ダイバーシティーは初めから存在していたのだ。ぐちゃぐちゃな姿で。それを見えなくしているのがノーマティビティーとマージナライゼーションである。

私たちはダイバーシティーに「取り組む」 (図鑑作りに励む) だけではなく、ダイバーシティーを「取り戻す」 (ノーマティビティーとマージナライゼーションに抵抗する) 必要があるのではないか。

これはつまり、これまでの社会において、人のありようを他者化し、序列化し、抑圧する力が作用してきたことを直視し、その抑圧に抵抗することが必要だという主張である。

多言語主義という理念についても、おなじことがいえる。つまり、単一言語主義といえるような制度、状況、言論などがこの社会にあり、社会の主流言語だけが価値のあるものとされ、公的なものとされ、教育されるべきものとされ、文書に書かれるべきだとされる。その状況のなかで、地域のバリエーションや少数言語の価値は否定され、継承していくことはムダであるとされる。そして、主流言語ではない自分のことばをバカにされたり、禁止されたりするなかで、自分

自身も「はずかしい」と感じるようになる。「みんな」とおなじことばをはなすようになる。そのような構造が、社会のなかにある。その現実に抵抗することを多言語主義ということはできないだろうか。単一言語主義に抵抗するという意味での多言語主義をたちあげることが必要なのではないだろうか。この授業では、そのような問題意識にたち、多言語社会を論じる。

解放のための社会言語学

・ひとつではないのに

ダイバーシティという表現は、最近の日本ではあちこちで使用されている。英語で表記すると、diversityである。この語は、英語では2種類の発音があるといえる。語頭の「di」を「ダイ」と発音するか、「ディ」と発音するかの2種類である。発音はひとつではない。けれども、どちらかの一方だけを「正しい」ととらえて、他者の発音をおとしめる場合がある。

・ふたつあることが知られている場合でも

たべものがいい味をしているとき、日本語では「うまい」とか「おいしい」という。すっかり定着している表現であるのに、「うまい」という語は「男性にふさわしい」表現というような規範意識がある。しかし、性別に関係なく、「うまい」とか「うめえ」といってもいいではないか。

ただたんに、傾向を観察し、それを記述するのなら、「女性は「うまい」ではなく、「おいしい」ということが多い」ということはできる。しかし、おおくの場合、傾向というものは、いつの間にか規範として作用し、例外をみとめない態度をうみだしてしまう。この社会には、女性はあまり「うまい」ということはないという「傾向」があるだけでなく、「女性は「うまい」などというべきではない」という「規範」がある。「どちらでもいいよね」という態度では不十分であり、「「うまい」といって、なにが悪い」という対抗的／批判的な態度が必要である。

まとめるなら、「ひとつではない」ことについて、ひとつではない現実をしめしていくことが第一に必要であり、一方的な規範にたいして、「おかしい」と声をあげていくことが第二に必要である。この授業では、そのような解放のための社会言語学を追求する。

授業のながれ

1. 多言語主義について
2. 『日本語学級の子どもたち一引揚げの子どもが会う〈日本〉』（1983年）をよむ
3. 言語的少数者にとっての学校
4. 言語を学ぶということ
5. 災害がうつしだす言語問題
6. ことばを矯正ということ
7. ことばと優生思想
8. ことばと性規範
9. ことばをクエアする
10. 制度化された識字の問題
11. 識字のユニバーサルデザイン？
12. ピクトグラムでみんなに通じる？
13. 情報技術による多言語化と均質化
14. 復権と解放のための言語権
15. まとめ

ことばについて固定的にとらえ、それ以外のありかたを否定し、たったひとつのかたちだけをよしとする態度がある。そのような、ことばについての規範主義の問題に注目し、そのような不寛容な態度がどのように一部の話者を不自由にしているのか、しばりつけているのかをあきらかにすることが、この授業のねらいである。だれもことばで苦勞しない社会をつくっていくために、なにが必要なのかを考える。

評価について

学生による関連情報の提示と小テスト：30%

期末レポート：70%

・授業の最後10分に、コメントを書いてもらいます。有意義な質問や関連情報を書いてください。ほかの学生が読んで参考になるようなことを書くようにしてください。「なるほどと思った」というようなただの感想はやめてください。

・小テストを2回くらい実施する予定です。

・レポートは、自分で明確にテーマを設定し、その主題・論点について適切な文献を参照・引用しながら状況と議論を整理したうえで、自分なりの考察をくわえるというスタイルとします。題・テーマが具体的であること、きちんと先行研究をおさえていること（文献を参照して要約あるいは直接引用すること）、自分なりの考察をくわえてあることを評価基準とします。毎回の授業を、レポートを書くための参考、刺激としてとらえてください。なお、文献を参照して記述した部分については、かならず本文中でもそれぞれ明記すること。レポートの最後に「参考文献一覧」として明記するだけでは不十分です。本文中で出典を書いていない場合は、評価する価値のないレポートと判断し、単位も不可とします。題をつけていない場合も同様です。メールで提出する場合、あてさきをまちがわないようにしてください。

参考文献

あべ・やすし 2015 『ことばのバリアフリー—情報保障とコミュニケーションの障害学』生活書院
かどや・ひでのり／あべ・やすし編 2010 『識字の社会言語学』生活書院
かどや・ひでのり／ましこ・ひでのり編 2017 『行動する社会言語学』三元社
佐野直子（さの・なおこ） 2015 『社会言語学のまなざし』三元社
砂野幸稔（すなの・ゆきとし）編 2012 『多言語主義再考—多言語状況の比較研究』三元社
多言語化現象研究会編 2013 『多言語社会日本』三元社
中島武史（なかしま・たけし） 2018 『ろう教育と「ことば」の社会言語学』生活書院
マサキチトセ 2017 「ダイバーシティは「取り戻す」もの—差別の歴史の中で生み出された”性的指向”と”性的嗜好”の違い」 <https://wezz-y.com/archives/50457>
安田敏朗（やすだ・としあき） 2018 『近代日本言語史再考 V—ことばのとらえ方をめぐって』三元社

関連する雑誌

『社会言語学』（ウェブサイトで一部公開 <https://syakaigengo.wixsite.com/home>)
『ことばと社会』
『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』（<https://mhb.jp/archives/category/journal> で全文公開）
『社会言語科学』（刊行から2年すぎた号は全文公開 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jajls/-char/ja>)
『言語政策』（論文のほとんどがウェブサイトで全文公開 http://jalp.jp/wp/?page_id=168)
『日本語とジェンダー』（2015年までの号はウェブサイトで全文公開 <https://gender.jp/journal/introduction/>)
『日本語教育』（刊行から2年すぎた号は全文公開 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/nihongokyoiku/-char/ja>)
『英語教育』
『異文化間教育』
『日本語学』
『月刊言語』

関連する映画

『マダム イン ニューヨーク』 『ピグマリオン』 『英国王のスピーチ』 『ネル』 『ヴァンサンへの手紙』
『パレードへようこそ』 『100,000年後の安全』